

ベル・エポックのイタリア閨秀作家とその小説世界  
 アマーリア・グリエルミネッティ Amalia Guglielminetti (1881-1941) 著  
 『悦びの扉 LA PORTA DELLA GIOIA』(短編小説集) 邦訳 (その6)

清 瀬 卓

〈Sommario〉

La serie di saggi di traduzione in giapponese de *La Porta della gioia* di A. Guglielminetti si conclude con la presente prova, per presentare al pubblico giapponese l'ultimo racconto intitolato *L'Ombra che scende*, il cui tema principale è l'amore materno di una madre per i figli e i suoi sacrifici senza ricompensa.

In Europa durante la Belle Époque era ancora di moda il matrimonio d'interesse tra la borghesia nascente nella nuova società moderna e la bella ragazza in gamba, nata in povertà per poi diventare amante dei gentiluomini, appunto come accade tra il barone Almichi e Mara, due protagonisti nella prima parte del racconto guglielminettiano. Fedele alla tradizione narrativa di G. Boccaccio, novelliere, la nostra narratrice ritiene molto importante, nella seconda parte del racconto, la presenza della Fortuna che vuole girare la ruota del nostro mondo. Il *Fatum* che gli antichi greci chiamavano ἐμαρμένην, prepara, infatti, una tragica morte per la baronessa Anna Maria Almichi, che si suicida gettandosi dagli scogli in mare, per garantire la felicità di cui sua figlia può godere nelle nozze con il suo fidanzato, ex proprietario della sua villa.

降りてくる影 (L' OMBRA CHE SCENDE)

アルミーキ老男爵が長い断末魔の末に息を引き取ったとき、黄褐色の髪の色から、ティツィアーノ風の女という異名で、かつて彼の多くの知人たちに親しまれていた女性マラーは、突然アンナ・マリーア・アルミーキ男爵夫人を名のるようになった。未亡人の面纱付き喪服を着た彼女は、自分の高貴な伴侶がキリスト者として亡くなった田舎の古い屋敷を売り払うことに決めた。

男爵は、死の床にあって、おそらくは後顧の憂いから、さらには孤独な学者貴族の優しい感謝の気持ちからであろう、喩えて謂えばモンロウ・ウォークの燃え立つような髪の中の健気な恋人と婚礼の儀を遂行したのであった。彼女は、色香がうせて崇拜者たちが姿を見せなくなり始めたこの15年の間に、季節が変わるごとに彼のもとへと戻ってきていた。

そのたび毎に、男爵は屋敷の門戸を開けて、この太陽のように明朗な女性を一時の賓客などではなく一人前の貴婦人として、率先して灰色の壁の静謐な邸内で接待そうとした。彼女は決して誰も笑わないときに大笑いをして、厳格な命令と恭しい返答しか聞こえてこないときに、これ見よがしに闊達にまくし立て、アルミーキ男爵家の謹厳で敬虔な歴代夫人たちが威儀を正して坐って

きた金皮張りの立派な安楽椅子ソファアーノに寛くつろいでは、首の後ろに両手をまわして、短いスカートの小さな足を小刻みに動かしたりした。

それは、大富豪と頼りにしていた外国の友人が、モンテカルロで彼女のために賭けをして、彼女が履はいていたハイヒールの宝石をちりばめた留め金までスッてしまい、不運な滞在から彼女が舞まい戻ってきた春の或る日のことだった。マーラには、自分の老いた後見人バトロンが住む由緒ある邸宅が、いつもより活気がなく静まりかえっているように見えた。彼女は帰還する度ごとに、用意万端整って花で埋まった男爵お気に入りの絢爛豪華な食卓けんらんこうかに、彼といっしょに着席する慣ならわしだったが、そのときばかりは、白髪めしつかいの召使めしつかいに男爵の寢室ベッドルームへと案内された。壁の凹みの天蓋アルコーヴの隙間から、男爵は蒼白い顔に微笑ほほえみを浮かべて、瘡やせ細った片手を彼女に差し伸べた。

「今回ばかりは、わしは浪費家の娘の帰還を盛大に祝ってやるができない。」——彼は、マーラの手袋の愛らしい手の上に白い無精髭ひげを揺り動かしながら、弱々しい声で云った。寢台ベッドの傍らに、所在無く不機嫌に坐っていた彼女は、衰弱しきった孤独な病人に対して、次第にある種の憐憫れんびんの感情とほとんど実の娘のような愛情が湧いてくるような気がした。彼は、自分の苦しみなどそっちのけで、彼女のご機嫌をとろうと、例によって上品なことばを愛想よく彼女に投げかけ、興味深々といった様子で近況を訊ねたりした。病人の頬ほおがこけた気の毒な顔は、彼女が善良な心に突き動かされて、次のように語ったとき、歓びのあまり満面に輝きを放った。

「あなたがすっかり恢復かいふくされるまで、ずっとお側に寄り添っているつもりよ。このわたしに、あなたを一生懸命看病させて下さる？」

「可愛いお前、それを云うなら、わしが死ぬまでと云っておくれ。お前の素晴らしい青春の時間を、たとえ東の間であれ、こうして犠牲にしてくれることに、このわしが同意できるならばのはなしだが。」

しかし、マーラの素晴らしい青春はすでに45年の歳月けみを閲していたので、彼女は3ヶ月半の間それを犠牲にしても、さほど悔くいることはなかった。彼女は、アルミーキ男爵に寄り添って、臨終の日まで何くれとなく献身的に面倒をみた。

こうして彼女は、ほとんど何らの物質的な見返りを当てにするでもなく、慈悲深い愛の衝動に突き動かされて、彼の世話に専念した。彼女の世話は、彼の不治の病を治そうとするものではなく、病人の眼や魂を慰めようとするものであった。彼が公証人に一通、司祭にも一通の遺言をそれぞれ発送してから、死ぬ前に自身の称号を彼女に譲渡し、その財産を遺産として彼女に残すつもりだと易々やすやすと宣言したとき、彼女はただ瀕死の彼の手ひんしに唇くちびるを押し付けて黙って泣く以外に、感謝・感激の気持ちを表すすべを知らなかった。

あれから数週間が経った。アンナ・マリーア・アルミーキ男爵夫人は、使用人たちを解雇し屋敷と家財を売り払って、かつて運命の気まぐれから数奇な恋愛遍歴の渦中に彼女を引き込んだあらゆるしがらみや思い出から解放されると、自分の運命を左右した土地を離れて、遙はるか彼方の海辺の街一番のホテルに中年の家政婦を伴ってやって来たのだった。未亡人の喪服いかめを厳しく威儀いぎを正して着用した彼女が、いまは亡き夫の資産を惜しげもなく鷹揚おうように費やすので、人々の耳目を引

くことになった。

\*\*\*

一方で、彼女は住む家をさがした。さまざまな物件に当たっては慎重に考慮してから、古い修道院の廃墟跡地に建てられていたので《僧院》と呼ばれていた豪華な別荘を一軒購入することに決めた。

別荘はその厳肅な雰囲気からしても、周囲の広々とした庭園からしても、また物々しい呼称にしても、お買い得の物件だったので、彼女の気に入ったのだった。

売却を担当した不動産屋は、彼女が別荘の所有者となるための契約書に署名すると、媚びるような笑みを浮かべて、こう云った。

「男爵夫人はご満悦のことかと拝察申し上げます。と申しますのは、時価の3分の2の費用で入手されたのですから。若旦那はどのような価格でもよいから売却したいと申されましたので、わたくしめがお売り致しました次第で。」

「若旦那って、どなたのこと？」

「《僧院》の持ち主のレアツィアーニ兄弟の年長の方で、現在羅馬に在住されている人です。弟君の方は、愛着あるその屋敷を手放すに忍びず、売却に反対のご様子でした。そのような事情でございましたので、わたくしめが、もう一方の方に命じられまして、男爵夫人のご希望を受け入れて頂くように説得する必要がございました。」

「レアツィアーニ？」——アンナ・マリーアは、契約書に署名するために脱いでいた黒いレイヨウ皮の長い手袋を右手に通しながら、心のなかで呟いた。しばし額に皺を寄せて、心当たりがあると思われる人物の記憶を探った。しかし、心当たりの人物は見つからなかった。

立ち上がって、不動産屋の丁寧な挨拶に軽く会釈をすると、入り口に待たせておいた自家用車に乗り込んだ。それから、彼女は新しい住まいの所有者となるために向くことにした。

お供をしたのは、22年間忠実に仕えてきた家政婦のクレリアだった。彼女は夫人の運命が長い年月の間に閱した多くの有為転変を共有し、その事情を十二分に知り尽くしていた。小柄で美しくはなかったが、身なりに細心の注意をして、夫人の傍に寄り添うことで、年々派手になってゆくアンナ・マリーアの垢抜けした美しさを大いにバック・アップした。ふたりの間には、お互いに信頼し許しあう暗黙の了解が成り立っていた。それは、異質な二つの個性の間に生まれ、互いを必要とすることで強まってゆく類いの絆だった。

ふたりの女性が別荘の前で車から降り立つと、番人が待ち構えていて、鍵束を手渡してくれた。それから、ふたりは自分たちを迎えてくれるはずの住居の周囲を一巡してみることにした。

それは、初秋の穏やかな午後のひとときだった。古色蒼然とした庭園の木々は、金粉をまぶしたように、まだ暑い日差しに輝いているかに見えた。陽光は、開かれた大きな硝子窓から、半分引き上げてあるレースの窓帷の下に、柔和な芳香ある波となって入ってきた。そして臘光りのする床面に明るい縞模様を細長く描き、布地や絨毯の色をひきたてながら、絵画の額縁に映えて、

鏡の奥で赤く燃え上がっていた。陽の光が、人気のない静まりかえった住まい全体を強烈すぎるほどの生気で活気づけ、未知の存在の鼓動を甦らせ、穏やかにその歴史を明るみに引き出したので、恋愛遍歴の<sup>アドベンチャー</sup> <sup>ヴェテラン</sup> 大人の心は、不本意にも他人の内面に土足でずかずかと踏み込んだかのように、恐縮至極の格好になった。

彼女は、庭園に面した角の部屋にかなりの時間足をとめた。その部屋は、白と金色の内装のお蔭で、他の部屋に比べて、ずっと<sup>はつらつ</sup> 澁刺とした若々しい雰囲気<sup>コーナー</sup> に満ちていた。彼女に付き添って、ときばきとすべての扉<sup>ドア</sup> を開け閉めしてくれる家政婦にむかって、彼女は明るい柔らかな<sup>ほほえ</sup> 微笑みを浮かべながら、不意に決然とこう云った。

「これは、さしずめ彼女の寝室ね。」

やつれた顔のクレーリアは、小さな眼で上目使いに、説明を待った。

「エルダが寝るのは、この部屋よ。明日になったら、わたしは彼女を寄宿学校へ出迎えに行つて、これからはずっとここで彼女といっしょに暮らすの。」

「お嬢さまとおっしゃいますと？」

「ええ、わたしの娘のエルダのこと。娘を自由の身にしてあげる機会<sup>とき</sup> が来たと思わない？ あの児は、可愛そうに、それだけを願っているの。以前は、できなかった相談だったけれど、現在の状況だと、わたしにも娘を持つことが許されるわ。」

ほとんどいつも調和や融和感に乏しい耳障りな声の持ち主の彼女は、ほんの一瞬挑発的な<sup>あざけ</sup> 嘲りの笑い声を発した。その笑いは、クレーリアが自分の意見を述べたとき、苦惱でいっぱいになった。

「その通りでございます。お嬢様は<sup>はたち</sup> 二十歳になられますから。すぐにもご結婚なさらなければなりません。」

アンナ・マリーアは、彼女の眼をじっと見つめた。

「クレーリア、お前はわたしの娘が結婚相手を見つけることができると信じているの？」

「もちろんですとも、奥様。」

「彼女を<sup>しあわ</sup> 俸せにできる善良で謙虚な男性ですよ？」

「男爵夫人、もちろんですとも。」

クレーリアは、かつての気の毒な恋愛遍歴女性にではなく現在の裕福な貴婦人に向かって、確固とした肯定の返事をするかのように、そのことばにぐっと力を込めて云った。それでも、相手はこだわった。

「エルダはアルミーキ男爵の娘ではないわ。」

「<sup>てて</sup> 父親なし<sup>こ</sup> 児でもございません。」

「それは、もちろん違うわ。役所に父親の名前がちゃんと届けてあるのですもの。」

アンナ・マリーアは窓際の低い肘掛椅子に座って、落日の光が当たっている木々の葉叢<sup>はむら</sup> の方に、うつろな視線を向けていた。そうしながら、彼女はかの不運な教師セレーニィのことを考えていた。彼は算数や地理の授業のあい間に、小さなエルダを膝<sup>ひざ</sup> の上に乗せて、自分のことを《お父さ

ん》などと呼ばせていたが、ある日、公の場で正式に自分が彼女の父親であることを認める決心をしたのだった。彼は30歳で窒扶斯チフスに罹かかって亡くなったが、上流の令嬢にふさわしい教育を受けさせることができるようにと、わずかばかりの財産を彼女に残していた。

彼女の母親は、この任務を立派に果たしてきたと信じていた。エルダは二十歳で洋琴を演奏し、絵を描き、数ヶ国語をしゃべり、古典詩人の味読を通じて、また避暑地から戻ってきた女友だちの打ち明け話を通じて世間というものを知っていた。

彼女は、丘の上にある寄宿学校所有の農場で、尼僧シスターや両親のいない仲間と数ヶ月の休暇を送った。そうして、とても退屈に思っていた書物と洋琴ピアノを忘れて、野辺や葡萄畑ブドウを駆け廻る倅しあわせを味わった。彼女の性格は、柔和で、むら気もなく、情愛豊かだった。知性はあらゆるものに開かれていたが、打てば響くというわけではなかった。感性はじつに繊細だったが、想像力に恵まれていなかった。彼女は立ち止まって、自身の運命の特殊性をじっくりと考えてみたことはなかった。あれほど若く、見かけは裕福で、しかも一切の家庭のしがらみから自由な母親を持ちながら、なぜいっしょに暮らすことが叶かなわず、しかも常に面会日以外の日に、談話室の片隅で、1、2時間ほんの少しか会うことができないのか。彼女は母親のことをわずかしら知らなかったけれど、その母親が大好きだったので、聞き分けのよい生徒を演じて、寄宿学校を出て母親といっしょに暮らすことばかり夢見ていた。

アルミーキ男爵が亡くなって数日も経たない頃、アンナ・マリーアはエルダの面会に出かけた。そのとき、彼女は初めて自分の生活を話して聞かせた。夫婦として、また未亡人として経験したことを、高揚した気分と敬虔な良心からほとぼしり出る悲痛なことばに託して物語った。寄宿学校生徒の黒い美しい眼は、ためにしばしば感動の涙に濡れた。ふたりは、いつもにまして優しく別れの挨拶あいさつを交し合った。そして、母親は、娘をすぐにも寄宿学校から出して、自分のところに引き取りたいと、そのとき初めて約束したのだった。

全身喪服姿のふたりの婦人が、《僧院》の玄関前で車から降り立った。荷物を使用人が降ろしている間、彼女たちは互いに腕を組んでアプローチの徑みちを辿たどった。一步あゆんでは立ち止まり、あたりを見廻しては意見を述べた。意見や説明は、母親の口から控えめに囁かれたが、賞讃のことばは、ようやく自分の家に一步をしるそうとする乙女の口から、驚きと感嘆の小さな叫び声となって、澁刺はつらつとした歓びの感情とともに発せられた。

なにもかもが彼女を驚かし、喜びでいっぱいにした。何百年もこんもりと生い繁る植物、濃い木蔭のあちこちに置かれたシーニャの土地にはまだ目新しい長椅子ベンチ。忍冬の頭巾スイカズラを被った簡素で小さな門が僧房のようで、彼女の気に入った。灰色の大理石でできた二重の階段と鑄鉄製の巨大なシャンデリアのある厳しく豪華な別荘ごうしゃの正面に、彼女は魅了され感激を味わった。

自分の部屋に入ると、彼女は周囲をぐるっと見廻し、たくさんの鏡にみずからの全身が、頭からつま先まで、正面からも横からも映うつっているのを初めて見ると、快いと同時に悩ましい未知の煩悶に心が囚われ、激しい動悸を覚えた。彼女は、その時点で自分を待ち構えている今までと違った生活への不安な予感すら察知した。自分の知らない内面と純粹で柔和な未熟さと動揺のあ

まりに、彼女は軽い眩暈めまいに襲われて、顔面蒼白となって眼を閉じた。でも、すぐに母親の腕に救いを求めて、まだ多少震えながらも、桃色ピンクがさした蒼白い顔に微笑ほほえみを浮かべて、母親にこの馬鹿げた興奮わを詫びた。

「お母さん、この気持ちを理解して頂けたら、どれほどわたしは嬉しいことでしょう。わたしのためにこれほど美しい家を用意し、幸福を願って、わたしのためにして下さったすべてに対して、わたしはいったいどう感謝すればよいのでしょうか。」

彼女は、学校の作文の文句を使って、自分の気持ちを表現した。自分が倅しあわせで戸惑いを覚えていることを彼女は正直に語った。しばらく思案してから、彼女はさらに続けた。

「わたしの学校仲間の誰ひとり、あなたのように善良で美しいお母さんを持っていません。その気の毒な奥さん連中がどのような装いをしているかご覧になれば、さぞ愉快なことでしょう。アデーレ・フェッラーリの母親は薬屋の奥さんで、ご主人じょうざいの錠剤を宣伝するように、帽子のつばの周囲にぐるっと垂れ下がった黒い小さな珠たまの輪を付けています。リータ・ヴァッツィの母親は退役大尉の奥さんで…」

「エルダ、聞きなさい。」—— アンナ・マリーアは彼女のことばをさえぎって、少女のウェーブのかかった黒髪をゆっくりと抱擁した—— 「さあ、食事に降りて行きましょう。その後で、あなたに家の隅々まで詳しく案内してあげますから。」

「ええ、いいわ、母さん。」

「お前自身のことや、欲しいものや希望だけを話題にしなさい。毎日、お前が考えていることや懂れていることを、何もかも話しておくれ。」

彼女は娘の柳腰に片手をぐるっと廻して、普段の調子で話しかけながら、先にたって案内した。その声の調子には、深い感動に沈んだ生真面目さがあったので、自分でもハッとした。

それは、咄嗟とっさに発せられた母親の声で、深く抑制された特徴そなを具え、女としてのもっともはかり知れない意識から出てきたものであった。

彼女のあまり魅力的でない特徴のひとつで、おそらくその美貌と唯一そぐわないところは、自分でもよく承知していたが、その声がいつもキンキンして耳ざわりだったことである。彼女の友人には、それを気につけない人もあったが、一部の人は、そうした彼女をからかった。より耳が敏感な何人かは、それが垢抜けしない楽しみだとしても、頭がガンガンして聞くに耐えないと云った。

今、娘に向かって話している自分のことばに耳を傾けると、抑揚に変化があり、情愛のこもった響きの美しい調子ではあるが、ちよっぴりもの悲しげで不安げで、一様に静かで生真面目だった。まるで悔恨かいこんの気持ちをおさえ、懸念けんねんを口にせず、エルダから受ける畏敬の念に戸惑いを覚えているかのようであった。

その瞬間から、彼女は自分が母親であることを意識しはじめた。それは、誰にも共通する情愛の背後に気を配り、頼りにされようとする情熱的な母親の存在だった。自分の願望は抑え、犠牲ブルジョワジーは覚悟の成金階層の母親としての存在であった。それは、ひたすら娘の背後に身を引いて自分を

捨てようとし、娘に相応しい縁談を気にかけることしか念頭にない母親の姿だった。

エルダは母親に似ていなかった。ほっそりとして、黒髪で、きらきらと輝く黒い眼まなこをしていた。保護されることを求めるような脆く媚もろこびような美しさがあった。ふたりは、一様に地味でシックな黒い衣装をまとっていた。年齢と体つきが少しも似ていない姉妹にも見えた。一方は、まだ若く澁刺はつらつとしていた。片方は、修道院の教育を受けた関係で、礼儀正しく真面目だった。

アンナ・マリーアの過度に目立つ人柄は、厳格な喪服に隠されていた。髪の毛の黄褐色の輝きも覆い隠され、時々顔を出した彼女の過去のなごりである極端に無頓着な態度や振る舞いも、次第に影を潜め、形跡をとどめなくなった。

彼女たちは、その年の冬を、表面上は穏やかな春先の温もりと情愛あふれる家庭の兄弟のように味わい深い孤独のなかで過ごした。それは、エルダの純な心にとって信頼に満ちてはいても、漠然とした不安のためにアンナ・マリーアの辛い経験にとって落ち着かないもたれあいの関係だった。

彼女は、自分の過去が娘の将来に汚点を生じる可能性があることを知っていた。それで街路でも、公共の集会でも、お茶をいただいたり演奏会コンサートを聴いたりするために連れ立って出かけた社交の場でも、集あつまってきた人々のなかの誰かが彼女の素性を知ってはいないだろうか、誰かが名乗り出て挨拶し、連れの華麗な女友だちとの晩餐会に彼女を招待しはしないかと終始びくびくしていた。

彼女は絶えず用心していた。できるかぎり面纱ベールの背後に自分を隠して、自分自身を否認し、あえて自分に接近しようとする浅薄な連中を尊大な撤回発言てっかいで屈服させる用意があった。

しかし、偶然が今日まで彼女に幸いし、入念な用心が彼女に味方してきたとはいうものの、屈辱的な懸念けんねんに苛まれどおしであった。その懸念は、時には無意識に伏在したままだったり、時にはあまりに鮮烈なので身にこたえ、ほとんど接吻キスすることすら頬を汚すのではないかと怖れた彼女は、どうしても自分の唇を娘の初々しい頬ほおから遠ざけざるをえなかった。

感情が横溢して、ただ浅薄で思慮に欠け害毒をもたらず結果におわるような場合ですらも、彼女は終始一貫して情念の女だった。疎遠になり見放され裏切られ侮辱されたりすると、鋭い感受性が、ほとんど彼女の感情生活のはっきりしない要求せうごと齟齬そごを生じて、煩悶することになった。

彼女の意識に遅く芽生えた母親としての情熱が、苦痛をともなうほど猛烈に現在の彼女の心をとらえていた。彼女に芽生えた愛しい子供とともに暮らす喜びは、清らかさをそこなうことで、子供をだいなしにしてしまうのではないかと危惧の念と結びついていた。いずれにしろ遠からず、ある日がやってくれば、娘は真実を知らされる運命にあるのだと確信した。そうした事態は、エルダが苦しい驚きを経験し、自分に対して不快な恨みをいただき、娘の情愛以上にもっと完全な、より徹底した別の愛情に保護を求めることが可能になったあかつきに、ようやく生起してくれるはずだった。

このような感傷的な理由だけでなく、もっと他の実際的な配慮からも、はやくエルダは結婚する必要があった。腹黒い人間や、暇人ひまじんや、熱心な道徳家には、さまざまな情報の断片を巧妙につ

なぎ合わせて、謎めいた美人の物語をでっち上げることは、朝飯前だった。退屈しきっている暇人連中にしてみれば、遠からずある日、女の過去の偉業を暴露するに至らずとも、その成り行きにほくそ笑みながら尾ひれを付けて世間に吹聴してみせることは、痛快極まりないことだった。

現在のところは、幸いにして彼女は単にアルミーキ男爵の未亡人で、丘陵地と海との間に建つ贅沢な別荘の所有者であり、確かに莫大な持参金付きの若く綺麗な結婚適齢期の娘の母親にすぎなかった。彼女は、術策を尽くし、全身全霊を挙げて、恵まれた境遇を利用しようとはっきり覚悟を決めていた。その好運ゆえに、悪い風評から清純な名前が根も葉もない疑惑の影で覆われてしまう前に、彼女はエルダの手を求める求愛者のあとに従うことにしていた。

エルダは、彼女の一点の翳りもない規則正しい生活のうちに、それまでおそらく自分自身のせいか他人のせいで味わうことがなかった晴れ晴れとした愉悦を見つけ出すはずであった。彼女は自分に相応しい男性には明るく無辜の初々しい魂を分かち与え、子供たちには意識的で力強い生みの親として誇らしい幸福を伴った神の賜物である人生を授けるはずであった。

どのような不幸の影も欺瞞も恥辱も蔑視も、彼女が産み落として祝福されずに受け入れた愛しい児の額に翳りを与えるはずはなかった。あたかも純粋の大理石の像が、墳墓のざらざらした灰色の花崗岩の台上に置かれると、光に向かって飛翔してゆくように、彼女の悲しい宿命は、少なくとも分身である娘がより輝かしい未来へと上昇してゆく踏み台になるであろう。奢侈と快樂に憑かれたかつての女一ひとりの老人の気まぐれから好運を手に入れた曖昧な浮気女は、すでに封印された墳墓の中に世間から永遠に葬られて横たわっているかのようには彼女には思われた。

\*\*\*

3月の朝のこと、エルダ・セレーニィは、植え込みの下に咲き初めた堇の花をさがして、《僧院》の庭を歩きまわっていた。すると銀の軽やかな鈴の音が聞こえ、顔を上げると、生き生きとした黒眼の白い仔犬が、まじかで興味ありげに彼女を観察していることに気づいた。その眼が眼鏡のように隈っていて白垂のルッカの石膏のように滑々とした仔犬は、通路のまん中に四つんばいになって、じっと立っていた。

エルダは微笑んで手招きをした。でも、小さな獣は走って逃げ、すばやい円弧を描くと、やがて彼女のところへ戻ってきた。問いかけるかのように賑やかにほえながら、彼女のまわりを跳ね廻りはじめた。

「どこから入ってきたの、お前？ 名前はなんていうの？ 飼い主は？」——エルダは可愛がる仕種をしながら、彼女の方から訊ねた。ほとんど無意識のうちに、フォックステリアの仔犬が跳ね廻るあとを追って、玄関のところへ来ていた。

そこに着くと、仔犬は佇んで、気が狂ったような歓びにかられて、背が高く金髪フロンドの髪しんの若い紳士の方に向かって吠えはじめた。シックな衣装に身をかためた彼は、何度もくりかえし仔犬の名前を呼んだ。

「ハッピー、ここだよ！ こっちへ、ハッピー！」



乙女が後からやってくると、彼は帽子を恭しく取って、失礼を詫びながら、彼女の別荘の庭先にずうずうしく仔犬が闖入してしまったわけを説明した。

「お嬢さま、許してください。〈ハッピー〉は数年の間そちらで自由に遊んできたので、庭園をよく知っています、まだ自分がそこの主人だと信じているのです。門の柵がほんのわずか半分ほど開いていましたので、なかへ入ってしまったのです。」

エルダは赤面した。よく事情のみ込めなくて戸惑い、頭を振った。内気でいて愉快な困惑に囚われ、襟首と袖口に白鳥の縁取りのある白い羊毛の衣装に身をつつんだ彼女は、とても優しく綺麗に見えたので、青年はなおも話し続けようとした。

「お嬢さん、自己紹介することを許してください。わたしはヤーコポ・レアツィアーニと申します。毎日この別荘の前まで散歩にやってきます。わたしは、〈ハッピー〉同様に、数年間そこに住んでいましたから。」

「レアツィアーニさんとおっしゃいますと？ 《アッパツィアー》の古くからのご主人では？」——エルダはようやく発言することができた。彼女は、閉まっている囲いの鉄柵の向こうから彼に微笑んだ。小さなフォックステリア犬は、そのとき飼い主のところへ行こうとして、貪欲で機敏な身体で柵の間をすり抜けようとかなり苦勞していた。

彼の方は、面白がって、無作法な闖入を演じた犬を叱った。丁重な会釈をしてから、小娘のもとを辞去した。彼の姿は、橄欖樹の銀色がかった灰色の葉蔭の下を、海の方へと遠ざかって行った。一方、エルダは、指にはさんだ真新しい董の茎をもみくちやにしながら、注意深く眼で彼の後姿を追った。

数日を経ずして、ヤーコポ・レアツィアーニはアルミーキ男爵夫人からの封書を受け取った。それは、古い別荘でのお茶会への招待状だった。《僧院》の庭園は小さな友だちに解放しますとのことだった。

翌日の午後5時に、彼は出かけて行った。思い出いっぱい広い園内を横切りながら、やや興奮していた。灰色の大理石の広い階のたもとにしばし仔でみた。2年前、母の遺骸はここから降ろされて、靈柩馬車へと担ぎ込まれたのだった。

男爵夫人は、一階の広間で彼の到来を待ちかねていた。そこは、彼の母親のお気に入りの部屋で、昔と少しも変わっていなかった。夫人は実に背が高く、色白で、黒い服を着て、簡単に低く結った髪はつやつやとして、結婚指輪だけはめた色白の手には他に指輪をつけていなかった。彼女は、低い声と威儀を正した丁重な身のこなして、敬意を込めて彼のことを即座に讚美した。

しかし、ほんの数日前のちょっとした珍事をふり返る段になると、彼女の態度は次第にとっても愛想がよくなり、しかも母親としての慈愛を惜しみなくふり撒いた。まだ驚きのあまり気が動転していた娘は、すぐさま夫人のところへ走って行って、その事件の一部始終を話したのだった。

そのとき、エルダが姿を現し、手を彼に差し伸べた。彼女の頬には紅がさして、眼は美しい黒髪の陰から輝いていた。

「先だっては、きっとわたしのことを愚かで失礼な娘に思われたことでしょう。」——彼女は

笑いながら素直に詫びを入れた——「あの時、すぐに〈ハッピー〉とごいっしょに庭園内へお招きすべきでしたのに。お好きな時に散歩に来られるためにも。」

「それは、結局のところ、わたくしどもがあなた様から奪い取った権利ですもの」——男爵夫人は、付け加えて云った。

「分捕った人間が礼節と慈愛を弁えているとき、その犠牲になった者は自分の運命をただ慶ぶことができるだけです」——ヤーコポ・レアツィアーニは、お辞儀をしながら、お世辞の笑みを浮かべて相槌を打った。彼らは、庭園に下りるテラスに面した場所で、お茶を飲んだ。庭の老樹の幹の間に、黄昏の董色の夕闇が濃くなっていた。青年が、またお邪魔してもよろしいかと訊ねて、お別れの挨拶をしたとき、母親と娘は彼を門のところまで見送っていった。彼は、自分のためだけの団欒に慰められる気がした。その厚意がうれしくて、親切な柔らかい手で抱擁されるような心なごむ思いがしたのだった。

彼はやって来る途中、元来は自分の所有だったが、すでに人手に渡ってよそ者に占拠されている屋敷のなかでは、居心地が悪くはないかと不安だった。彼らが、おそらく財産を奪われた人間に、卑下や戸惑いの微妙な感情を意識させまいと配慮してくれるほど洗練されているとは考えてもみなかった。ところが、まるで年齢も人柄も異なるが、等しく好感が持てて魅力的な二人の女友だちに囲まれているような錯覚を、彼は覚えたのだった。一方は彼にますます信頼を寄せてくれ、もうひとは、愛情を籠めて彼の心をいやがうえにも魅了した。しかも、彼の心情に親密で優しく映った人生のある時期を過ごした部屋が、素性の知れない人々によって侵入され蹂躪されたとも思われなかった。

すべてが、昔のままの面影を留めていた。それは、男爵夫人が家具調度品や内装のやや厳しい趣味に敬意を表していたからである。それが、また建物の荘重な様式とも、新しい住居で彼女が送りたいと考えていた生活のスタイルともうまく合致していた。

彼女はさまざまな男性遍歴を経験した者として、すぐさま青年から最良の印象を勝ち得たことに気づき、義理の母親になる希望に心が弾んだ。ヤーコポ・レアツィアーニは、母違いの兄弟でローマに住んで夜遊びと賭け事にのめり込んでいる長男のアッティーリオの無闇な散財が禍して、目下のところはいくぶん零落したものの、それでも上流の家庭に属していた。まさに兄の放蕩生活のつげが廻って、別荘の《僧院》はヤーコポの意志に反して売却されたのだった。ヤーコポは、いつものように兄の横暴な主張に屈服して、しぶしぶ譲歩しなければならなかった。

ヤーコポは、内気だが、頭がよく誇り高い男だった。やや年配の父親と、とても若い母親との間に生まれた彼は、年寄りじみた悲観的で慎重に過ぎる意識とともに、性格的に未熟な精神特有の優柔不断な弱みを持っていることを痛感していた。したがって、彼が愛していた所有地を売り払えというアッティーリオの執拗な主張を呑むことにすると、傷心のあまり憤懣遣る方なくて、自分の住む街に別れを告げて、数ヶ月というもの海外で暮らしたほどであった。つい最近になって戻ってはきたが、気難しい彼は、一軒の家を構える気にもさらさらなれず、仔犬一匹だけ連れて客舎住まいをしていた。気が向くと間歇的に音楽の趣味に向かうことがあっても、憂愁と平穩

とがない交ぜになった<sup>アンニユイ</sup>退屈を絶えずかこっていた。

今、こうした<sup>アンニユイ</sup>退屈には、固定観念のように、緩やかながら甘美で不安な何ものかが息づいていた。彼の家に暮らして思春期の思い出の庭園で<sup>すみれ</sup>堇の花を摘む黒髪の少女のイメージが、素敵な振る舞いと表情の<sup>ヴァリエーション</sup>変奏を伴って彼の空想に付きまとった。

熱にうかされたような夢の一週間が過ぎ去って、彼が戻ってきたとき、彼女はその時ばかりはひとりだった。彼らがたがいに両手でグッと握手した折、情熱のはずみに、急にふたりとも軽く気持ちが悪れ、まるで抑制が効かなくなって無意識の告白をするかのように、お互いを引き寄せようとした。

本能的な<sup>しんじょうとろ</sup>真情吐露の一瞬が過ぎると、彼らは自分たちの気持ちをことばに云い表せなかった。でも、その感情は、ヤーコポの利発な眼差しに、明らかな熱愛となってあらわれ、エルダの不安な微笑みに、じつに純真で素直な気持ちとなって表現されたので、経験豊かな母親は、たちまち彼らのことばにならない心の動きのなかにパッと崇高な火花が散るのを見て取ると、巧みに機転を利かせて、それが緩やかに燃えあがるように手を貸そうとした。

「この長い一週間の間、毎日何をしてお過ごしになってられましたの？」——彼女は、青年に母親のような友人の<sup>きづか</sup>気遣いを見せて訊ねた。

「戻ってくる<sup>タイミング</sup>時機のことばかり考えていました。」——彼は、ことばの熱気を<sup>おお</sup>覆い隠して、軽やかな口調で答えた。

「でも、どうして一週間も待つられたの？ もっと前に戻って来ることはできなかったの？」——湯気の立っている小さな<sup>カップ</sup>茶碗を覚束ない小さな手で彼に差し出ししながら、今度はエルダが訊ねた。

「そうしたかったのですが、控えておりました。」——彼は曖昧な口調でポツリと云って、少女を探るような眼つきでじっと見廻した。

「お願いだから、毎日でも、お越しになって下さい。」——男爵夫人は、気品のある歓待の心のこもった<sup>しぐさ</sup>仕種をして、ことばを継いだ——「この住まいは、まだあなた様のお家<sup>うち</sup>に変わりはないので。憶えておいてほしいわ。」

それ以来、ヤーコポは、ほぼ毎日午後になると《僧院》へやってきた。彼は、次第に母親に信頼され頼りにされる友人になった。娘には、控えめながら熱烈な求愛者になった。しばしば、彼は<sup>とこほる</sup>常春の微笑むこの土地に無造作に生えている珍しい花を摘んで、豪華な花束を作っては前もって届けさせた。時には洋琴の前にエルダと彼が座ると、彼女は心もとなく夢中で演奏して彼を飲ばせてくれた。そのような時、彼はすっかり恍惚状態になって音楽のうねりに身を任せた。それは、心を奪われ尽くした恋する男の表情だった。

いよいよヤーコポ・レアツィアーニが、アルミーキ男爵夫人に娘のエルダと結婚したいと申し出る日がやってきた。それは復活祭の週のことで、多少縁起をかつぎ信仰の心得がある青年には、キリスト復活の時期に婚約するの<sup>さいざき</sup>は幸先が良いと思われた。まるで長い<sup>ひしろう</sup>孤独と悲しみの無気力状態から、彼の生活が本来の状態に復帰して、新しいふたりだけの歓喜へと飛翔してゆくかのよう

に思われた。

彼はエルダの黒髪に翳<sup>かげ</sup>っている額に接吻しながら、感動にくぐもった声で、その気持を述べた。彼女が顔色を失って彼の胸に身を委ね、しばし眩暈<sup>めまい</sup>に襲われて眼を閉じたとき、柔らかな手でグッと掴<sup>つか</sup>まれて、心が痛む感じがした。彼女は微笑みに顔を輝かせて、すぐ身を起こすと、彼がやってきたときに母親に見せたと同様の一瞬の気後れを彼に詫びた。

母親はしきりと胸で呼吸しながら窓辺に棒立ちになって、やや離れたところから、その熱烈で清純な抱擁を自分が近づいて行くことで邪魔するのを恐れるかのように、黙って娘の姿を見つめていた。いつものように晩遅く、彼女が娘の三つ編みの髪を解いてやったとき、娘の告白を聞いても驚かなかった。

「もしヤーコボがわたしと結婚してほしいと云わなかったら、わたしは寄宿学校へ戻って、<sup>シスター</sup>修道女になっていたことでしょう。」

「じゃあ、お前は彼をほんとうに愛しているのね？ わたし以上に？」——<sup>べっこう</sup>鱧甲の櫛<sup>くし</sup>で髪をゆっくりと梳<sup>す</sup>きながら、彼女はエルダに訊ねた。

「わたし、どう云ったらいいか分からないの。愛し方が違うのは確かよ。」——戸惑いを隠しきれないエルダは眩<sup>つばや</sup>くように語ると、脇<sup>わき</sup>まですっぽりと覆っている波紋<sup>なみず</sup>のかかった黒い肩掛けを揺り動かした。やがて、身をかがめながら母親<sup>せつぶん</sup>に接吻すると、その場を出て行った。

「わたしは多少心配です。」——ヤーコボは一瞬エルダが席をはずしたので、男爵夫人に打ち明けた——「兄は、わたしが婚約したことを、どこからか聞きつけると、かんかんに怒って、一通の手紙を書いて遣<sup>よこ</sup>し、1年以上まったく便りを寄こさなかったとあって、実際の落ち度も含め、根も葉もない無数の罪をなすりつけてわたしを非難するのです。わたしは彼に返事を書いて、音信が長らく途絶えたことを詫<sup>わ</sup>びるつもりです。そして、わたしの結婚式に彼を招待するつもりです。わたしには、他に身寄りが無いのです。わたしは、反目の原因も恨みの感情も忘れてしまったことにたいへん満足しています。で、あなたはどうかお考えですか？」

「おっしゃる通りですわ。<sup>えんごん</sup>怨恨というものは、ことごとく鳴りを潜<sup>ひそ</sup>めるべきです。彼はあなたの実の兄で、あなたの苗字<sup>みょうじ</sup>を名乗っているのですから、婚礼には招待される必要がありますし、むしろそれは義務ですわ。」

「ありがとうございます、今夜にでもさっそく彼に手紙を書きます。」

エルダが庭園から〈ハッピー〉に追いかけて、不意に走ってこちらにやって来たので、彼らは口を鎖<sup>とざ</sup>した。彼女にとって、犬は離れられない伴侶になっていた。彼らはその話題をほんの数日してから、また口にした。

「アッティーリオはわたしに返書をよこして、招待をOKしてくれました。そればかりか、一週間か二週間後、ちょっと時期が早いものの、海辺で海水浴シーズンが始まるので、出向くと云ってきました。いつもの無作法で、<sup>ローマ</sup>羅馬では人々の間で<sup>ヴァカンス</sup>休暇に出かけることが話題になっているが、リーミニやヴィアレージョへ行くよりも、むしろ当地へ来て<sup>アンニョイ</sup>退職の経験をしてみたいなどと、彼は云い添えてきました。しかも皮肉をこめて文面を締めくくりながら、将来自分の弟嫁に

なり、わたしの義理の母親になるべく運命付けられているとても素敵の人々と知り合いになれることに、ひじょうな興味をもってると云っています。」

アンナ・マリーアは唇を噛んで、怒りのことばを抑えた。しかし、ほろ苦い冷笑を堪えることはできなかった。

「あなたのご兄弟は、この結婚にさほど感激されているご様子ではなさそうですね。」

「そんなことはわたしにはどうでもよいことです。」—— ヤーコボは冷ややかに云い捨てた—— 「それに、男爵夫人、あなたはお気づきでないが、それがアッティーリオの流儀なのです。彼に悪気はありません。でも、時々、彼の傲慢さには辟易させられます。幸いながら内面も外見も、わたしたち二人に共通するところは何もありません。」

「誰とですか？」—— 夜会服の試着に長い間てこずって、その時やと戻ってきたエルダは、陽気に話に割って入った。

「わたしの困った兄弟のアッティーリオとの間に。」

「似てはいらっしやらないの？」

「全然！ 容貌も体格も性格も、まったく違います。明日、何枚か彼の写真をお眼にかけましょう。あなたに写真だけでもご覧に入れて、彼とわたしを比較してもらって、わたしの方が限りなく好感もてて、素敵で、とりわけ好男子であることを分かっていただきたいものですから」—— ヤーコボは笑って約束し、身をかがめて男爵夫人の手に親密な敬意をこめた接吻をした。彼女には、漠然とした困惑の翳りが、まだ消え去らないままに、つきまとっていた。

翌日、ヤーコボ・レアツィアーニは、緑の涼風に満ちた庭園に面して開け放たれたヴェランダで、ちょうど珈琲をすすり終えると、すぐにも首都の著名な写真家の名前が金文字で印字されている大きな箱を召使に持って来させた。彼の仕種の落ち着きはらった単純さと、そのことば使いの軽快な心地よさは、特筆に値した。彼は大きな肖像写真を何枚か引っぱり出して、冗談めかした厳かな口調で、こう云った。

「ここに憚りながら、写真ではございますが、我が兄弟の道楽学教授アッティーリオ・レアツィアーニ氏をご紹介します。頂きたい。」

彼はテーブル越しに、くすんだ幅広の紙葉を男爵夫人に差し出した。彼女は光の方角を向いた。半分下ろしてある窓帷で彼女の顔が翳になっていたので、ヤーコボもエルダも彼女の肩がピクッと急に揺れ動いたことも、その頬全体が不意に蒼ざめたことにも気づかなかった。

彼女の口元は、何度か神経質にひき攣った。睫毛を何度もしばたいてから、ようやく彼女は愚かな動揺を隠す必要性を感じた。それには微笑む必要があると思った。

彼女は、微笑んだ。エルダとヤーコボが、他の肖像写真を見ては、あれこれ意見を述べたあと、彼女の方を向いて質問する時まで、彼女は愛想笑いでごまかしていた。

「お母さん、どう思う？ 彼って、わたしには四十男に見えるけど。」

「男爵夫人、わたしに似ていないでしょう？」

「似てらっしやらないわね。」—— 彼女は鸚鵡返しに云って、しばらく間を置いてから、真顔

になって、こう付け加えた。—「これって、悪人の顔だわ。なんだか怖いわ。」

ふたりの若者は、冗談と思って笑った。彼女には分からなかったが、彼らは他にいくつか意見を述べてから、飲み終わった茶碗カップや萎れた草花や火の消えている煙草シガレットの間に写真を投げ出すと、悦びの喚声と笑いに包まれた少年少女のように、庭園の木蔭へと駆け出して行った。陽気なフォックステリア犬のほえる声と銀鈴の鳴る音が、彼らに伴っていた。

そこで、アンナ・マリーアは例の肖像写真のところに戻って、身をかがめながら、硬い表情をして、憎悪に満ちた眼差しで、長い間じっとそれに見入った。

ぼんやりした記憶の闇の中から、晴天の霹靂へきれきのように、突如、例の顔と名前と男の姿が、彼女のめまぐるしい過去からよみがえってきて、小馬鹿にしたような冷笑を浮かべて彼女を見つめ、意地の悪いしかめ面をして、冷たく陽気な皮肉の籠もった声で彼女にこう云った。

《またまた、こんなところで鉢合わせというわけだ。お前は俺を侮辱して捨てた。多少の歲月が経って逢ってみると、すっかりお前は様変わりして、名前まで変えている。相変わらず俺は、ろくでなしのアッティーリオってわけだ。お前はアンナ・マリーア・アルミーキ男爵夫人と名乗って、外見は誠実な貴婦人レディーにおさまっている。良人との間に娘までもうけて、俺の兄弟と婚約させている。マール、俺はうれしくて、仕方がない。だが、いくつか問題がある。俺の兄弟は、いくなれば海千山千の下賤なあばずれ女の娘を嫁にもらうわけにはゆかない。俺の兄弟は、俺と同じ誉れある家系に属している。お前のごとき庶民と縁組することはできない。分かるかい、俺の云っていることが?》

陽気で冷たい皮肉とともに発せられたかかるとばが、くすんだ写真から聞こえてくるように思えた。男の顔は細面で、単眼鏡モノクルをかけ眼窩をしかめているので、アンバランスアンバランスだだったが、仇の蔑むような視線で彼女をジッと見据えていた。ほんの一時期ふたりの関係が続いていた頃、高慢で鼻持ちならない賭事師は、彼女にとって冷酷な敵であった。或る不運の晩、この男はツイていた勝負相手から彼女を奪い取っておいて、餌食えじきに嫌気が差したかのように、日を経ずして彼のもとへ彼女を送り帰したのだった。

彼の名前は、ほとんど識り合った当初から記憶に残っていなかった。しかし、彼女に接するときに見せた悪意の籠もった皮肉と、卑しい邪魔者じゃまものとして彼女をお払い箱にしたときに見せた侮辱的な軽蔑の表情は、彼女の用心深い感受性のなかにずっと残っていた。

暗礁に乗り上げながらも、ある種の自尊心は依然として健在だった。波乱万丈の遍歴を経るなかで、彼女は数多くの侮辱に曝されると、その自尊心をしきりとあらわにしてきた。なかでも、その男が加えた侮辱は、忘れ去られて癍痕化していながらも、未だに消しがたい小さな心の傷として彼女のなかに残っていた。

彼女は、当時のことを想い出していた。その頃、難を逃れて古い友だちの家にかくまわれた彼女は、そこで友人の優しい心尽くしと愛情いっぱい敬意に包まれて、不快な落胆から少しは立ち直り、それを一時的に忘れることができたのだった。

アンナ・マリーアは無視するような態度をとって、彼女をおびえさせた肖像写真を遠ざけた。

だが、すぐにも彼女は、日を経ずして、<sup>おもかげ</sup>面影だけではなく、生身の人間が登場して、口をきき冷笑しながら彼女をジッと見据え、その正体を見破ることになるだろうと考えていた。そう考えると、激しい動悸がして、胸が苦しくなるように思われた。

ちょうどその瞬間、庭園へと続く通路の奥に、エルダとヤーコポの姿がふたたび見えた。彼は彼女の腰に腕を廻して、ふたりそろって白い夏の衣装に全身を包んでやって来た。こんな風に、背が高くスリムで機敏な彼らは、陽光が木漏れ日となって地面にも、彼らの服にも、無帽の髪の毛にも点々とつくる<sup>こんじき</sup>金色の<sup>はんでん</sup>斑点のなかを、はしゃぎながら軽やかな足取りで歩いてきた。その様子は、<sup>しあわ</sup>倅せな青春時代の<sup>エッセンス</sup>真価そのものや、新たに巡ってきた夏の<sup>おういつ</sup>横溢する<sup>こまかし</sup>歓喜をそこに凝縮したかのようなのだ。すでに人生を知り尽くし、情念と自分が犯した過ちと蒙った罪ですっかり<sup>しょうもう</sup>消耗している女は、そんな彼らを眼の前にすると、不意に疲労感を覚え、老いと悲惨と欺瞞とにまみれて無用の人間になってしまった自分を感じた。それでも地上に存在して、あのよう<sup>ういうい</sup>に初々しく光り輝いている<sup>いと</sup>愛しいふたりに混じって偽りの晩年の歳月を引きずって生きることは、彼女にとって愚かなずうずうしさとも<sup>グロテスク</sup>醜悪な強情とも思われるのだった。

「わたしは消え去るべきなのだわ」——彼女は、口の端に多少引き攣ったような笑みをつくって、ヴェランダの方へと坂道を上って来た婚約者たちに手を差し伸べながら、一瞬そう自分に言い聞かせた。

「なんて蒼い顔をしているの、お母さん。」——エルダは手に持っていた<sup>アイビー</sup>木蔦の長い枝を<sup>ベルト</sup>帯に挿しながら、彼女に意見を述べた。

「とても頭痛がひどいの」——アンナ・マリーアは、<sup>てのひら</sup>両の掌でこめかみを押さえて説明した——「部屋に戻って、ひとりで昼食をいただくべきだと思うわ。」

「わたしは消え去るべきなのだ」——彼女は、一晩中そうくりかえしていた。それから数日というもの、この基本的な考えは、彼女に付きまとして離れないどころか、むしろ時間が経つごとに、ますます強迫的で動揺させるものになっていった。

時間がいやおうなく経過してゆくとともに、恐れているあの男の到来がま近なものになり、彼を見つめ、彼からは見つめられて正体をあばかれる瞬間が近づいてきた。それを考えると、彼女は嘆きをぐっと<sup>こら</sup>堪えようと努めたので、歯がキーキーと<sup>きし</sup>軋んだ。

彼が過去のことをほめかしたりしないことは承知していたし、そう予感していた。しかし、抑えようのない長い笑いや、驚きとあざけりとかからかうような同情と意地悪な<sup>む</sup>歡喜がない交ぜになった笑い声が、彼女を打ちのめし、<sup>ちっそく</sup>窒息させ<sup>ふしょく</sup>腐食する<sup>じょうき</sup>蒸気の噴出のように、彼女に襲いかかることは察知し予感していた。

彼女には、何も知らない哀れな弟を道連れにした後で、<sup>こっけい</sup>滑稽な裏切りの盲目的な犠牲者で策略のもつれた網に絡めとられた無邪気な獲物が、すぐにも<sup>しんらつ</sup>辛辣な<sup>あざけ</sup>嘲りのことばを吐き、<sup>ざんぎやく</sup>残酷性を剥き出しにして、彼の<sup>しゅうとめ</sup>姑となるべく運命付けられた女アルミーキ男爵夫人の過去をあらいざらい彼に暴露するだろうことは分かり切っていた。

そうなれば、彼女自身にとっても娘にとっても唯一の<sup>いきが</sup>生甲斐——性質は違っていても程度は同

じ渾身の力をこめて両者がともに目指している最高の倖せは踏みにじられ、彼女たちの足下の悪臭を放つ泥のぬかるみに沈んでゆくことになる。

結婚への心もとない期待、親密な関係を承認し愛情を純粹で分かちがたいものにしてくれる間近に迫った婚礼の歓びは、憎悪の笑い声と憤怒と悔恨の涙のなかに雲散霧消していった。遍歴の女の娘にとっては、冷たい駆け込み寺の中庭か、母親のような不埒な寄り辺ない放浪生活しか、あとに残されていなかった。

「わたしは消え去るべきなのだ」—— ヤーコボが電報を彼女の目の前に差し出したとき、アンナ・マリーアは、これが最期と自分に命じた。アッティーリオは、明日の晩に到着すると告げてきた。

彼女はその電文を二回読んだ。胸の奥に蟠るような戦慄を感じ、不意の乾きを口に覚えた。ハッと我に返ると、落ち着き払って、舟の遊覧を提案した。

帆の影になったクッションに寛ぎ、側には娘が、眼の前には陽気に權を漕いでいるヤーコボが居るなかで、彼女は何日も味わったことのない平穩な夢見心地と、柔らかな慰めの心地よさにあやされるにまかせた。彼女の軽くほやけた想念は、この前まで心を魅かれ悩まされたことがらから、もはや切り離されていると感じる人や、次第に安息の忘却へと降りてゆく者の考えだった。

地底の短い通路で《僧院》の庭園につながっている岩礁の多い小さな浦を進んでいたとき、彼女は、無関心をよそおってこう云った。

「海水浴療法を始めるために、数日後ここへ戻って来るつもりよ。すでに最適の季節だから。」

「兄がやって来るまで待っていただきたい。それから水の精になってはいかがです。お供させて下さい」—— ヤーコボは彼女に冗談めかして、そう助言した。それから、權を放して、煙草に火をつけた。

でも、男爵夫人は頭を横に振って、やや辛い笑みを浮かべた。

「わたしは、ひとりで水の精になりたいの。わたしの年齢には、そうするのが分相応ですから。」

「気を付けて下さいよ、この岩礁は危険ですから。」—— 青年は、煙草の煙を吐き出しながら、彼女に忠告した—— 「とっても深くて、溺れると、二度と生還できませんし、死体すらあがりませんから。」

「自殺候補者には、うってつけの場所ね」—— 無頓着にアンナ・マリーアは、そんなことを云った。しかし、小柄なエルダは身震いした。それから笑うと、ヤーコボに抱きつき、悲劇性を冗談めかして、彼にこう告げた。

「あなたがわたしを裏切ったりしたら、この崖っぶちから身を投げてやるから。」

彼らは空全体が夕焼けに包まれ、黄金色の光の反射に海がきらめく黄昏時に、岸に舟を着けた。男爵夫人は娘の腕に支えられて、別荘への長い道を上っていった。それほど、彼女は疲れを感じていた。夕べの時間に、彼女は意識をほとんど混濁させる一種の無気力的昏睡状態に陥って、何



度も身体をこわばらせた。しかし、夜になると、彼女は自分の部屋に引き籠もり、気を取り直して、入念に手紙類を選別し、かなりの便箋を処分し、肖像写真をすべて破ってから、数週間先の日付を記した手紙形式の短い一通の遺書を娘に宛てて書き始めた。彼女は、その遺書に、ヤーコポ・レアツィアーニとの結婚に心から狂喜していること、またその結びつきがもたらす幸福な結実を確信していることを表明し、彼らに自分の全財産を譲り渡し、二人を祝福して抱擁する旨を認めた。

明け方になって、彼女は眠りについた。鉛のような眠りから目覚めたとき、すでに昼近くになっていた。かしずいてくれる家政婦のクレリアに助けられて、彼女は起き上がると、朝食のために階下に入り、若者らしく痺れを切らして待っていた婚約者たちに、遅くなったことを詫言した。

「多少お疲れ気味ね」——エルダは優しく彼女の肩を抱いて、不安げにそう指摘した。

「わたしはいくぶん気持ちが悪く動揺していて、あまり眠ってないの」——彼女は抱擁を返しながら、こたえた——「でも、今日は海水浴をするつもり。そうすれば、わたしの神経過敏症は、即座に治まるわ。」

「今日は、車で出かけることに決まっていたのではなかったのですか？ それから、今晚やってくることになっているアッティーリオを迎えに行くことにしていました。」

「あなたたちは行って頂戴、わたしはここに居残って、あなたたちを待っていますから。」

白い面紗のエルダとチェックの縞柄のベレー帽を被ったヤーコポの姿が、クラクションの響きとともに《僧院》の門を後にして消えてゆくと、アルミーキ男爵夫人は緩やかな足取りで岩場へと向かった。小径の青い砂利の上に黒い衣装の長い裾を曳きながら、白い小さな日傘で、古い臘燭のように蒼白い顔を太陽から守り、なにも被っていない頭は、艶々とした黄褐色の髪の毛で燃えたつばかりだった。

小径には、人氣がなかった。彼女が着衣を脱いで水着に着替えるのを手伝ってくれるために、磯の浪うちぎわに建つ木造の小屋で、クレリアが彼女の来るのを待っていた。でも、彼女は自分で着替えたいから、助けてくれなくてもよいと云った。

「いいから、帰りなさい。自分でします」——そう云ってから、クレリアに別れを告げるし種をした。すでにクレリアが遠ざかってしまってから、彼女は戻ってくるように云い付け、低い岩の上に腰をおろし、足でわずかに水面に触れながら、ひと休みすると、ややしわがれた声で、こう云った。

「わたしは気分がすぐれないと伝えておくれ。それから…」——彼女は話を中断して、頭を横に振り、精神的な苦痛に顔を引きつらせて、躊躇うように一息ついてから、付け加えて云った。

「なにも云わないでおくれ。いいかい、なにも云うでないよ。分かったね。ちょっと手を貸して、クレリア。」

彼女はぎゅっと力をこめて、漂泊人生の忠実なパートナー女性の素直な手を握った。その手だけが、彼女が人生に別れを告げ、この世に暇乞いをするに際して、まだ握ることができた唯一の

手だった。彼女は苦笑いをして、彼女にそっと小声で云った。

「もう帰っていいよ。云いつけたことは忘れないように。今晚は、別荘に客人がいらっしやる予定だから。」

クレリアは戸惑いながらもその場を離れた。何度か後ろを振り返っていたが、小径の角のところでその姿は見えなくなった。

黄昏ま近の紫色に煙る海は、まだうっすらと光っていたが、岩礁は黒々とした姿をいっそうあらわにしていた。

「降りてくる影よ、これは」——忘れられた黒い糸のもつれさながらに、下の岩場にじっと佇んだまま、女はボソッと呟いた——「わたしの上に、わたしの過去と現在の上に、わたしが犯した罪の上に、今後も犯し、ために苦しまなければならないかもしれない罪の上に降りてくる影なのだわ。」

彼女は膝の上に顔を伏せて、身体を丸くして、長い間、女泣きに泣いた。その嗚咽は、感情の発露であり、こんな風に人生に終止符を打たなければならない自分自身を哀れに思う身を裂くような悲しみの涙だった。それから、やっとの思いで立ち上がると、白い日傘で身体を支えて、一歩また一歩と岩場の頂へと登っていった。眼を閉じたままの彼女の全存在は、渦のみ込まれていった。

## 註および参考文献

本稿で邦訳に際して使用したテキストは、Amalia Guglielminetti, *La porta della gioia* (1920, Vitagliano, Milano) であるが、今回は、そのうち 220 頁から巻末の 257 頁までを試みに邦訳してみた。

本短編の主要主題は、母親の無償の愛とその犠牲的精神であるが、一方において作者グリエルミネッティの小説作法は、ボッカッチョの文学的伝統に忠実でもある。短編集『デカメロン（十日物語）』にあって、しばしば指摘されることであるが、運命の女神の仕業によって人はさまざまな人生の末路を辿ることになる。そうした運命の気まぐれが演出した巡り合わせのために、本作品の主人公であるアンナ・マリーア・アルミーキ男爵夫人は、実の娘の将来の幸福を思っ、自ら命を断つ。今は男爵夫人におさまっているかつてのマールは、数奇な恋愛遍歴で世間の噂のタネになっていた女性であるが、欧米社会ではベル・エボック時代にいたるまで、中流階層以下の生まれの女性が独力で出世しようとすれば、旧貴族や富豪の男性に取り入って、玉の輿に乗る以外に手立てはなかった。美貌の娘が、恋愛の手續手管に長けていれば申し分なかったことはいうまでもない。

やや時代が遡るが、19 世紀欧州社交界のスキヤングルの最たるものは、ローラ・モンテス事件であろう。V. パルンボ氏の概略を紹介すれば、エリザベス・ロザンナ・ギルバート (Elizabeth Rosanna Gilbert) 通称ローラ・モンテス (Lola Montez) は、1821 年 2 月 17 日にスコットランド人エドワード・ギルバート海軍少尉とアイルランド議会議員チャールズ・シルヴァー・オリヴァーの私生児だった 14 歳未満の母親との間に生まれた。一時はカルカッタに移り住んだが、父親はコレラで亡くなり、6 歳から世話した養父たちは、1832 年に彼女をバースの学校に入れた。1837 年、英国の母親のもとに赴き、トーマス・ジェイムズ中尉と駆け落ち結婚して、夫の任地インドへ渡った。4 年後、不倫を理由に離縁されると、1843 年、スペインを旅して、マームズベリー卿の庇護の

下、戦争未亡人の西班牙人舞姫ローラ・モンテスを名乗った。1843年6月ロンドンでデビュー後、数年間、彼女はタランテッラ舞踊（蜘蛛踊り）興行を売り物に、皇帝の私的な謁見を許されたサンクト・ペテルスブルグからドレスデンへ、ワルシャワからパリへ、リガからベルリンへとヨーロッパ各地を巡業して廻り、大アレクサンドル・デュマの肝いりでオペラ座の舞姫となり、フランツ・リストの愛人となり、フレデリック・ショパンやプロスペル・メリメの気を引いた。《ラ・プレス》紙の共同経営者アレクサンドル・アンリ・デュジャリエとのうたかたの恋は、1845年3月11日の決闘で終止符が打たれ、1846年10月、彼女はバイエルンのミュンヘン王立歌劇場と契約を結び、毫碌した国王ルートヴィヒ1世の寵愛をほしいままにした。61歳のルートヴィヒ1世は、国家の予算から彼女のために資金を捻出させて華美な宮殿を建設、1847年8月25日の彼女の誕生日とされた日にランツフェルト伯爵夫人の称号を授与した。かたや彼女は職務に熱心に励み、政務庁を創設し、ナポレオン法典を導入、イエズス会の権力の縮小をはかったために多くの敵を作ったという。1848年2月12日、ローラが夜陰に紛れて列車で逃亡すると、3月20日ルートヴィヒは退位し、彼女はスイスに避難後しばらくして英国に戻った。1849年7月19日、裕福な英国人将校ジョージ・トレイファー・ヒールドと再婚し、ジェイムズとの離婚問題が未決着だったので重婚罪で訴えられた。米合衆国へ旅立ち、1851年12月、ニューヨークで初舞台を踏み、1851年から1853年まで米国東部を巡業。同年7月2日、ジャーナリストのパトリック・パーディー・ハルと結婚するも、10月初旬には新聞で彼らの離婚が噂された。米国からの独立をカリフォルニア住民に訴えかけるキャンペーンを張り、新しい王国《ローラランド》を宣言して女王におさまるつもりだった。オーストラリアに一時期を過ごし、米国へ舞い戻った後、1857年ヨーロッパに帰還した。翌年正月あらためて渡米、占星術に凝っては、女性の権利獲得のため活躍したが、1860年6月30日ニューヨークで脳卒中に倒れ、翌年1月17日肺炎のため40年の文字通り波乱万丈の生涯を閉じた。

日本ではまったく話題にもされることがない歴史上実在の女丈夫 Lola Montez に関して、マックス・オフェルス Max Ophüls 監督の映画『ローラ・モンテス *Lola Montès*』（仏獨共同制作 1955 年）は大いに参考になる。ピーター・ユスティノフ Peter Ustinov とマルチヌ・キャロル Martine Carol が共演した本作は、ディレクターズ・カット復元デジタル・リマスター版がシネマテーク・フランセーズおよびロサンジェルステクニカラー社によって 2010 年に完成、『歴史は女で作られる』の邦題で紀伊國屋書店から DVD が発売されている。

伝記的研究書には、Bruce Seymour, *Lola Montez: A Life*, Yale University Press 1996 や Roberto Giardina, *Lola Montez: ballerina e avventuriera*, Rusconi 1992 および Valeria Palumbo, *Donne di piacere*, Sonzogno 2005 がある。

